

『恋の手ほどき、おまかせください♥』

著：森本あき

ill：旭炬

宝来のことは、そのまま忘れるものだと思っていた。たった一度、見ただけ。言葉をかわしたこともない。

なのに、折にふれ、宝来のことを思い出す。

あのさわやかな風に触れたい、と、そんなことを考えてしまう。

だから、この学校を選んだ。宝来に教えてもらうのが目的だったから、桃のようにたくさん講師がつくのじゃなくて、一人だけのコースにした。

それが、紳士淑女養成一週間コース。

ネット申し込みをするときに、できれば宝来先生にしてほしい、とリクエストをした。大丈夫です、と返事をもらったときは、天にも昇る気分だった。

厳しいのはわかってる。怒られるのも、きちんと想定している。

それでも、もう一度、見たかった。

宝来が歩く姿を、目にしたかった。

なのに、まったく心の準備ができていないいま、望央の前に現れなくてもいいじゃないか！

心臓はドクドクいってるし、呼吸は苦しいし、何も考えられないし、いったい、どうしよう！

「ちょうどいい機会ですので、荷物を届けがてら、ごあいさつを、と思ひまして。レッスンは午後からですが、何か質問などございましたら承(うけたまわ)ります」

「ないです！」

望央は即答する。これ以上、ここにいてもらっても困るのだ。

だって、頭が働かない。

どうしていいのかわからない、まったく思いつかない。

「あの、ぼく…まだレッスン内容とか読んでないんで！ 午後までに何か疑問を見つけたら、そのときに相談させてもらいます」

「そうですか、わかりました」

宝来がきれいに一礼すると、荷物を部屋の中に入れてくれる。

そうか、宝来の挙動はまったく無理をしてないのだ。流れるように動くから、早峰のときみたいに、疲れないのかなあ、とは思わない。その美しさに感嘆するのみ。

これなら習いたい。桃が文句を言わなかったのも、理解できる。

「それでは、また午後に」

「はい、では、そのときに」

だけど、いまはそんなことを言ってる場合じゃない！ 望央が取ったコースの詳(しょう)細(さい)を調べないと！

望央は、ぺこり、と頭を下げると、そのままドアを閉めた。宝来に見とれてたら、先に進まないからだ。

バタン、と音がしてドアが閉まると、望央は荷物の中からノートパソコンを取り出した。

電源を探して、コンセントにつなぐ。昨日、充電をしてないので、そうしないと切れてしまう。軽いから外に持っていくときに便利、という理由で買ったので、もともと、あまりもちがよくないのだ。

パソコンを立ち上げて、パスワードを打ち込んで、無線LANにつなげた。桃のメールを開いて、この学校のホームページへ飛ぶ。

シンプルな造りのホームページは、用がない人を弾き出そうとしてるからだろうか。『コース説明』と文字だけがあるところをクリックする。

長期コース、短期コースとわかれていて、望央は、当然、短期コース。一週間のところを選ぶと、ずらりとコース名が現れた。その隣には講師人数。真ん中の三つほどが、講師一人のコースだった。

ひとつは望央が選んだ『紳士淑女養成コース』。そこを開いたら、宝来の名前があったので、ほかは見えていない。ひとつ下が…。

「うわあ…」

これのことか。『昼は淑女、夜は娼婦コース』。そのもうひとつ下は、『あなた色に染めますコース』。

…なんか、怪しい匂いがぷんぷんするのは、絶対に気のせいじゃない。

望央は、まずは気を落ち着かせるために、『あなた色に染めますコース』をクリックした。その説明を読んで、目が飛び出そうになる。

『いまの時代、セックスがますます重要性を帯びてきました。お見合いで結婚される方々も多い富裕層のみなさまには、悩みの種ともなっていることでしょう。そこで、この際、おたがいのセックスへの不満を打ち明けてみませんか？ 奥様を旦那様色に染めるもよし、逆もよし。専属のセックスセラピストが、一週間ですべてを変えてみせます』

「なんだ、これ一つ！」

どこの性産業だ！ そりゃ、講師が一人のはずだ。

ちょっと待って、ちょっと待って、ちょっと待って！

いやな予感が強くなる。『昼は淑女、夜は娼婦コース』の詳細を知りたくない。

だからといって、避けていてもしょうがない。

望央は深呼吸を何度かすると、思い切ってクリックした。中身を読んでいくうちに、青ざめてくる。

「…うそだよな？」

そこに書いてあったのは。

『可(か)憐(れん)な花嫁を娶(めと)るのもいいでしょう。ですが、夜の作法を知らない花嫁ですと、これから先、長くつづく性生活が悪夢に変わります。純潔がいい、という世(よ)迷(まい)いごとは、いますぐ捨ててください。昼は貞(てい)淑(しゆく)な妻、夜はまるで娼婦のように激しく乱れる女。だれだって、そんな花嫁を望んでいるはずです。夢を現実に変えましょう』

望央は、口を、ぽかん、と開けてしまう。

つまり、これは花嫁に夜の作法を教えるからお返ししますよ、ということで。

望央が望んだ、歩き方、だののレッスンじゃない。

望央は慌(あわ)てて、バインダーに綴(と)じてある時間割を見た。そこには、紳士淑女を養成するのとはほど遠いレッスン内容が書いてある。

『一日目午後、キスのレッスン。一日目夜、一緒にお風呂に入って、男の裸に慣れること。

二日目午後、手を使った愛撫。二日目夜、口を使った愛撫。

三日目午後、正常位挿入。三日目夜、後背位挿入。

四日目午後、騎乗位挿入。四日目夜、立ったまま挿入。

五日目午後、フェラチオ実習。五日目夜、自慰を見せる練習。

六日目午後、みずから誘う練習。六日目夜、みずから挿入。

七日目午後から夜にかけて、総合実技』

望央は何度も繰り返して目を通した。自分の読みちがいなんじゃないかと、目をこらしてみた。

だけど、結果はおなじ。

つまり、これは…。

「セックス教えます、ってことだよね!？」

午前中は全部休憩で、午後から夜にかけて、ひとつずつセックスについて教えていく。

こんなの、だれがやるかつ！

本文 p48～53 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>